

アウシュヴィッツにて

心理学助教授 佐方 哲彦

1994年の暑い夏の昼下がり、私は言いようもないやりきれなさを感じながらビルケナウ強制収容所の鉄道引込線の終点に立っていた。だだっぴろい広大な敷地に、数十棟の再現された煉瓦および木製のバラック、煙突と基礎だけが残る数百棟のバラックの跡、廃虚となったガス室、「死の門」をくぐる鉄道の引込線、それらを囲む鉄状網が静寂の中に整然と存在していた。その場所こそが、最大の「殺人工場」「最終処理施設」として知られたアウシュヴィッツ第Ⅱ収容所の跡地であった。そして、私が立っているのは、生と死の選別が行われた地点であり、科学の名を借りた非人間的な思想の行き着いた先でもあった。

アウシュヴィッツといえ、ARBEIT MACHT FREIの標語が掲げられた門と、部屋一杯に山積みされた数々の遺品やホロコーストの克明な記録の展示のある第Ⅰ収容所のほうが有名であるが、3キロ離れたところにあるビルケナウはその十数倍の広さがあった。すでに、第Ⅰ収容所で衝撃を受け、人間の愚行に呆然としていた私にとって、その広さは虚しさ以外の何ものでもなかった。そして、さらに慄然とさせられたのは、その隣には第Ⅲ収容所が計画されていたことだった。

大学で心理学を学び始めたころ、フランクルの『夜と霧』を読み、またミルグラムのアイヒマン実験での人間心理を教わって以来、一度は訪れてみたいと思っていたアウシュヴィッツであったが、スピルバーグの『シンドラーのリスト』の公開が良いきっかけとなり、「そこで人間が人間にいったい何をしたのか」を知りたくて、後輩の精神科医と共に訪ねたのである。見学を終え、重いところを引きずって帰ってきたが、貴重な体験であった。

アウシュヴィッツの悲劇をヒトラーの狂気とナチス・ドイツの愚行だけで片づけてはなるまい。なぜなら、ダーウィンの進化論が生んだ優生学思想の1つの帰結だったからである。あまり知られていないが、ガス室はフランスの学者が「生きるに値しない生」をもった人間を安楽死させるための施設として提案したものであった。このエピソードに代表されるように、科学の名のもとに作り上げられた当時の時代精神が、極端な形で病的に具現化された1つの結果にすぎないのである。そして、この悲劇の底辺には、生物学的発想による医学実践を是とし、人間への共感を忘れた多くの医師たちがいたことを忘れてはならない。

少しシリアスな話になったが、アウシュヴィッツは医師となる君たちに是非とも一度は訪れてほしい場所である。そこで生と死について、人間性について、考えてみてほしい。ちなみに、『シンドラーのリスト』の舞台ともなったクラクフという古都が近くにある。静かなたたずまいの美しい古き世の雅びの街が、疲れたところを癒してくれるだろう。